



CeMI 気象防災支援・研究センター

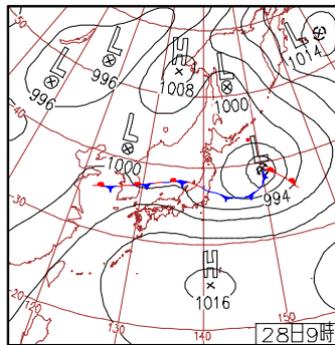
News Letter

Contents

1. 6月の梅雨前線豪雨
2. 「顕著な大雨に関する気象情報」
(線状降水帯の発生情報)の新たな運用について
3. お天気よもやま話
～夏至について

1 6月の梅雨前線豪雨

梅雨前線による大雨は梅雨末期の7月に多いことは知られていますが、過去には6月にも梅雨前線による大雨で大きな被害が出たことがあります。最近の20年間を振り返っても平成17年、18年、28年と3回も水害が起こっています。地域的にはやはり西日本が中心ですが、平成



天気図 (平成17年6月28日9時)

17年6月27日から29日にかけては新潟県を中心に福井県や兵庫県北部などで大雨が降り、特に新潟県では日降水量が300ミリを超えた所もあり、1人が亡くなり、700棟を超える家屋が浸水しました。図は平成17年6月28日の天気図ですが、梅雨前線は北陸地方から日本海南部にまで北上しています。

6月上旬から中旬にかけて西日本から東日本で梅雨に入り、本格的な雨のシーズンが始まりますが、例年この時期はまだ梅雨前線の活動がそれほど活発ではありません。しかし季節の進みが早い年には6月下旬ともなると大雨の危険が高まる場合があります。

最近の事例を紹介しましたが、6月の梅雨前線による大雨は過去にも大災害をもたらしたことがあります。昭和36年6月の梅雨前線豪雨では長野県の伊那地方を中心に洪水や土砂災害でこの地方だけで100人を超える犠牲者が出て、長野県としては昭和以降最大の気象災害となりました。また、昭和28年6月の梅雨前線豪雨では九州北部各県で6月23日から1週間にわたって断続的に大雨が降り続き、特に熊本県では犠牲者が500人以上に達する大災害となりました。

毎年、梅雨入りが発表されるとそろそろ雨の季節と思う反面、「まだ、梅雨に入ったばかり」とか「まだ6月だから」といった油断につながる思い込みをしがちですが、過去の事例は6月であっても決して油断はできないことを教えています。

毎年、気象庁が発表している梅雨入りのお知らせも、単に“季節の話題”ということではなく、大雨への注意喚起、備えという防災上重要な意味を持っています。

梅雨に入って梅雨前線が北上して九州や四国、本州上に位置するようになれば大雨の危険度は一層高くなります。前線の動き、そして気象情報には常に注意を払い、大雨への備えを怠らないことが大切です。



2 「顕著な大雨に関する気象情報」 (線状降水帯の発生情報) の新たな運用について

次々と発生した積乱雲が列をなして線状になった「線状降水帯」は、数時間にわたってほぼ同じ場所にかかり続けることで集中豪雨をもたらします。平成26年の広島市の土砂災害、平成29年九州北部豪雨、平成30年7月豪雨（いわゆる西日本豪雨）、令和2年7月豪雨など近年の大きな大雨災害では、線状降水帯が発生していました。

その線状降水帯の発生を知らせる情報として、令和3年から「顕著な大雨に関する気象情報」が発表されるようになりました。3時間に150ミリ以上の大雨となっているエリアの面積やそれが線状になっていることなど、4つの条件を全て満たしたかどうかを自動判定して発表するというものです。そして、今年5月25日からは、この「顕著な大雨に関する気象情報」が、これまでより30分早く発表されるようになりました。実際の発表文は、これまでと同じです。（右上図）発表文で重要なのは「災害発生の危険度が急激に高まっている」という部分、この危機感を伝えるためのメッセージと考えてください。今回の運用変更も、危機感を少しでも早く伝えるための改善です。

この情報が発表されたことを知ったら、気象庁ホームページ

顕著な大雨に関する〇〇県気象情報 第1号

令和5年〇月〇日〇時〇〇分 〇〇気象台発表

(見出し)

これまでの情報文と同じ

〇〇地方、〇〇地方では、線状降水帯による非常に激しい雨が同じ場所で降り続けています。命に危険が及ぶ土砂災害や洪水による災害発生の危険度が急激に高まっています。

(本文)

なし

「顕著な大雨に関する気象情報」の発表例 出典：気象庁HP

ページで雨雲の様子や災害の危険度を5段階で地図に表す「キキクル」などで、今どこで災害の危険度が高まっているのかを確認するようにしましょう。そして、キキクルで自分の地域が「紫」色になっているなど、災害発生のおそれが高まっている場合は、躊躇することなく避難行動を加速してください。この情報の役割は、皆さんの避難行動や防災対応の背中を押すことなのです。

ただ、大雨による災害は、線状降水帯が発生していない時でも起こることに注意が必要です。線状降水帯に関する情報が発表されていない時でも、大雨の際は、キキクルや河川の水位情報等を見て、大雨災害の危険度を自ら確認することが非常に大切です。

3 お天気よもやま話 ~夏至について

2023年6月21日は「夏至」です。1年で最も昼の時間が長い日になります。また、太陽高度も最も高い位置になって、7月や8月の真夏よりも太陽の日差しは強いですね。夏至の時期は日本列島ではちょうど「梅雨」の期間にあたるため雨が降ったり曇ったりで晴天率が低くなることから、梅雨明け後の夏空の方が、日差しは強く感じられると思います。梅雨明け前から紫外線対策が必要なわけです。

このように、北半球の中緯度帯（日本付近）では、日差しのピークは6月下旬になるわけですが、気温のピークは1か月あまり遅れて7月下旬から8月上旬になります。その理由は、大気や海洋の温度が上昇するのに時間がかかることがあげられます。夏至が過ぎても、太陽の日差しはしばらく強いので、1か月ほどは気温が上昇するというわけです。逆に、1年で一番気温が低い時期は、「冬至」の頃ではなく1か月ほど遅れるのは、簡単に言うと「暖かさ」が残っていて寒くなるのに時間がかかるためですね。

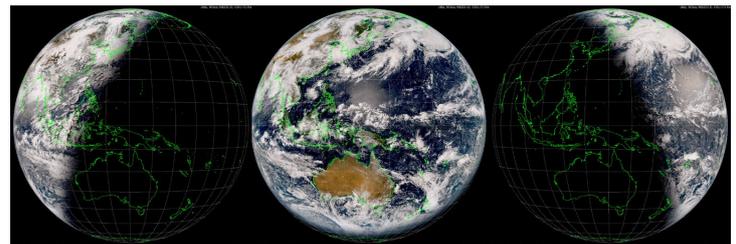
ところで、日本では、夏至の日、北海道の道東の午前3時35分ごろに知床や根室半島付近から夜が明けはじめるの

ですが、一番遅く夜が明けるのは、沖縄の与那国島の午前6時頃となっています。

日没は、それぞれ19時過ぎと19時40分となっていますので、昼の時間は北海道の方が2時間も長いということになります。

下の図は、夏至に近い6月15日の、「夜明けの頃」と、「正午」、「日没の頃」の3枚のひまわりの全球画像です。北極付近に注目するとどの時間帯も太陽の日が当たっています。いわゆる白夜です。地球の自転軸が傾いているので、夏は北極側から地球を照らすような形となってこのような現象となるわけです。北の方が昼の時間帯が長くなるのも同じ理由です。

全球トゥルーカラー再現画像の1日（2021年6月15日）



出典：気象庁



掲載内容へのご意見、そのほかサービスに関するご相談・ご要望等ございましたらお気軽にご連絡ください。

NPO法人 環境防災総合政策研究機構(CeMI)

気象防災支援・研究センター

〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22ローヤル若葉606号

<http://www.npo-cemi.com/center.html>

☎ 03-3359-7971

☎ 03-3359-7987

✉ advisory@npo-cemi.com

